第４章

doi: 10.18999/bulsea.65.152

北米拠点：北米－ノースカロライナ研修

佐　光　美　穂・三小田　博　昭

（1）目的

「課題探究Ⅱ」における本校生徒の研究課題を、アメリカをフィールドにし、ノースカロライナ州の高校生とペアを組み、共同で研究して研究発表を行う。一つのプレゼンテーションを作り上げる過程で、日本と米国の生徒が互いの価値観に気づき、グローバル化について考えを持つ。

名大附属側の生徒は、グローバル・コミッティに参加している生徒で、かつ「課題探究Ⅱ」の授業で「人権と共生」「文化」のいずれかのグループで研究活動をしている生徒から選抜された。

（2）実施方法

1）参加生徒

高校１年生10名（男子０名、女子10名）

2）引率教員

佐藤俊樹（学校代表）、佐光美穂

3）事前学習

2018年秋～	参加者は本校でのALE（４－５－１参照）に参加し、全10回の講義の中で英語でのディスカッションや発表のしかたを学んだ。
2018年12月	チャペルヒル高校日本語教師青柳好美先生より、現地での学び方や学習環境に関するレクチャーを受けた。

4）費用

学校負担分：

往復の航空運賃、現地バス借り上げ費用　など

生徒負担分：

旅行保険費用、国内移動の交通費、現地での食費　など

（3）研修日程

2019年３月９日（土）～18日（月）　10日間

日付	予定	宿泊先
３月９日（土）	移動日 セントレア集合 Raleigh-Durham International Airport着 ホストファミリーとの対面式	
３月10日（日）	ホームステイ開始 （～16日）	生徒はホームステイ 引率者は La Quinta Inn & Suites by Wyndham Raleigh Durham Intl AP
３月11日（月）～13日（水）	現地校での授業体験と課題研究	
３月14日（木）	午前 現地校での授業体験 午後 研究成果発表会 （Presentation Night）	
３月15日（金）	デューク大学、 UNC見学ツアー	
３月16日（土）	ホームステイ最終日	
３月17日（日）～18日（月）	移動日	機内泊

（4）生徒の研究テーマと発表概要

生徒は現地校（チャペルヒル高校、イースト・チャペルヒル高校）のホストファミリーの生徒の受ける授業を受けながら、日本語のクラスで、各校に在籍するホストの生徒と課題研究および、プレゼンの準備を行った。

学校での授業体験最終日の夕方に、イースト・チャペルヒル高校で研究成果発表会（Presentation Night）を実施した。現地で受け入れを担当した青柳好美先生の他、ノースカロライナ州立大学ジャパンセンターの部長、チャペルヒル高校の副校長らのゲスト、ホストファミリーなどが聴衆として集まった。

番号	研究テーマ	発表概要
1	Animal Welfare	日本にもアメリカにも、人間の都合でたくさんの犬や猫が無暗に生みだされ、殺処分される現状がある。動物愛護は重要である。
2	Japanese Hospitality	日本のおもてなしの起源は茶道であることを紹介し、いくつかの事例を通してその意味を解説した。文化の違いからおもてなしの意味がわからないアメリカ人の中には、フェイクだと感じる人もいるが、日本人の心からの行為だと伝えたい。
3	Organ Donation	アメリカでは日本より臓器移植が積極的に行われている。日本では死亡したかどうかの判定が難しいと感じられている。必要な臓器も不足している。日本でももっと移植が行われるべきだ。
4	Silver Seats in Japan vs. US	日本の優先席がどのようなものかを紹介し、なぜ日本にそのような制度があるのか、問題点が何かを整理した。アメリカには優先席がなく、障がい者や高齢者が使いやすい施設作りが進んでいる。日米比較を通して優先席制度の改善案を提示した。
5	United States of America vs. Japanese Education	教育に関わる諸問題として、日米での通学の方法、いじめ、授業中の生徒の普段の行動の違いを取り上げ、それぞれを比較して発表した。
6	Comparing Intermissions for Baseball in America and Japan	野球の休憩時間の使い方の違いを日米で比較した。アメリカは各自が好きなように過ごし、日本ではまとまって何かをするのを好む。ここに両国の国民性の違いがある。
7	Gender Equality	日本とアメリカはSDG's の達成の最低レベルにある。国際女性デーの認知度ではアメリカは日本より高水準であることを指摘し、チャペルヒル高校でのアンケートの結果から、SNSでの発信が有効と提案した。
8	America's Eye Condition and Japan's Eye Condition	日本の子どもの視力の現状と、その原因を調べ、アメリカの状況と比較した。結果を踏まえ、どのような方法でこれ以上の視力低下が防げるかを考察した。
9	Education for Accepting and Understanding Global Cultures	国際理解教育が日米の学校でどのようなプログラムで実施されているかを調べた。他国の文化を理解する能力や受け入れる力を身につけるプログラムが必要だと主張した。
10	Medical Support to Underdeveloping Countries	発展途上国の支援を日米で比較した。ユニセフの募金、服の寄付、医師の派遣でのそれぞれの実績を調べ、社会的な評価の違いがあると指摘した。

発表後には会場との質疑応答の時間が設けられた。発表の準備だけで手一杯だった生徒も多く、質問に十分答えられないこともあった。事前に準備しづらいことではあるが、普段の授業などでも質疑応答の練習ができるとよいと感じた。

（5）成果と今後の課題

1）成果１－生徒が成長したと思っていること

生徒の研修日誌のコメントより抜粋

・今回初めて日本以外の国に来たので、他国の生活様式が日本とどのくらい異なるのかや、授業の様子・料理など、様々なものに触れることができて、視野が広がり、色いろな事に興味をもつことができるようになった。

・コミュニケーション能力が身についたと感じた。また、どんな事にでもチャレンジしようと思えるようになった事でより多くの経験を積む事ができた。

・自分から行動できるようになったと思う。家族がいないから、すべて自分でやらなければならなかった。そのため、慣れない中、自分で注文したり、レジでお会計をした。その経験が自信につながり、研修前より自分から行動できるようになった。

・相手から心を開いてよりそってくれるのを待つんじゃなくて、自分から進んで仲良くなろうとすることが大切だということが分かった。滞在中何度も選択する場面があったが、心の中で何度も“どっちでもいい”という言葉を言っていた。でも英語でどっちでもいいとは言えないし、困った。でもそのおかげで自分のことは自分で決めなくちゃいけないなと思った。自分で決断する大切さを学んだ。

コミュニケーションに対する意識が総じて高く、それに関わるコメントも多い傾向にある。また、成長した点としてコミュニケーション面で積極的になれたという内容のものが目立った。生徒の行動がよい方向に変化したことは、本プログラムを実施して大きな意味があることだと思われる。

2）成果２－課題研究に関して

生徒のコメントは、個々の研究テーマに関わる内容が多かったが、多くの生徒に共通して見られるのは、わかったことを踏まえ、もっと知りたい、調べたいという意欲である。例えば、日米の比較ができたので、今度は他国のことも知りたいというコメントがそれにあたる。ここから、生徒がプログラムに参加したことを機に新たな課題の発見をし、前向きな姿勢を持つことができていることがわかる。今回参加した生徒は全員高校一年生で

あり、課題探究Ⅱの授業での個人探究活動がさほど進んでいない状態だったが、高校二年、三年次での学習活動にどのように活かされているのかを継続して観察する必要がある。また参加生徒が他の生徒に与える影響があるのかも追跡するとよいと考えられる。

英語での本格的なプレゼンや、プレゼンテーションソフトの活用は、ほぼ全員が初めての体験であり、達成感を感じている生徒が多かった。技術的な部分は身につけるのが難しくはなく、満足感も得やすいことが分かった。しかし、その一方では、研修終了後にも活きるスキルになっていなければ、一過性のものになっていく可能性も考えられる。

３）今後の課題

事前学習の担当と引率者が異なるため、生徒の課題研究が十分支援できていない点がある。引率教員は現地で生徒に助言をすることもあったが、これまでの経緯を踏まえていないため、本当に必要な指導が、必要なタイミングでなされたか、心もとない部分が残った。指導の一貫性という観点からは、可能な限り引率教員が事前学習に関わった方が望ましい。

また、ある程度の事後指導や経過観察もする必要があるとも感じる。本プログラムの主旨は、課題研究を海外で実施することであるが、生徒の中には語学研修のようなつもりでいる部分も見受けられた。一過性の体験で終わらせるのではなく、かつプログラムに参加できない他の生徒にも成果が還元できるとよいのだが、そのためには研修終了後に参加生徒がどのように体験を活かしているか、実情を知るとよいと思われる。

現地で、次年度から日本からの生徒が学校に入る許可が現地の教育委員会から取れなくなるかもしれないという話もあった。セキュリティの関係とのことで、やむを得ないことではあるが、生徒がアメリカの学校生活を体験することは、普段の学校生活と比較がしやすく、文化理解が進む重要な機会と思われる。次年度以降、このような利点を補う新しいプログラムを加えることが、本研修を存続させる上でも重要な課題だと考えられる。

（文責　佐光美穂）

（６）北米　ノースカロライナ研修（新型コロナウィルスCOVID 19のため中止）

１）目的

「課題探究Ⅱ」における６つの課題研究領域のうち、人権と共生[生存・差別・障がい]／平和[紛争・民族・国際理解]／文化[言語・芸術・表現]）で課題研究を行っている生徒を対象として行う。生徒の選抜は、校内で行う課題研究成果発表により、審査する。選抜された生徒は、多様な文化・価値観をもつ米国を将来の日本の姿と重ね合わせ、課題研究に関するフィールド調査を現地の高校生と協同で行う。

＜人権と共生＞からのアプローチ
・人権の問題や差別・障がいの問題等から多文化共生を捉える

＜平和＞からのアプローチ
・紛争と国際理解、民族問題等から多文化共生を捉える

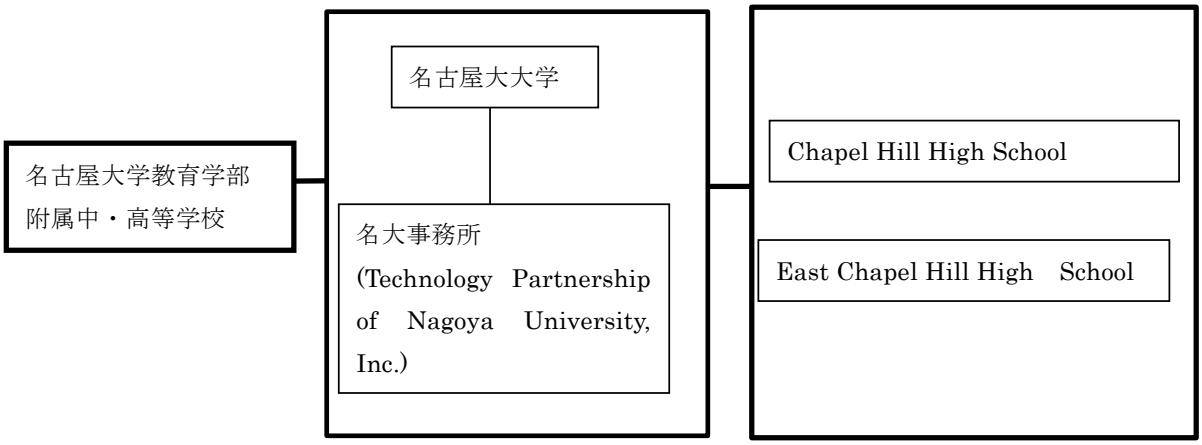
＜文化＞からのアプローチ
・言語や芸術・表現等から多文化共生を捉える

「Melting Pot アメリカから多文化共生を探る」
・East Chapel Hill High School, Chapel Hill High School の生徒、米国の大学教授、教育委員と協同で行う。

2）Why NC?

ノースカロライナ州は、高校生だけでなく一般的に日本ではあまり知られていない。日本からの直行便もなく、ノースカロライナ州へ行くためには、アメリカ国内で飛行機を乗り継ぐ必要がある。それにもかかわらず名古屋大学は、ノースカロライナ州に名大事務所（TechnologyPartnership of Nagoya University, Inc.）を持っている。その理由は、東のシリコンバレー、西のリサーチトライアングルと呼ばれるアメリカ東海岸を代表する高等教育機関や研究所が集まる世界有数の地域だからである。そのため多くの日本企業も工場を置いている。リサーチトライアングルには、正解大学ランキングでも有名はTHE（Times Higher Education）の上位に位置するノースカロライナ州立大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、デューク大学があり、世界中から研究者や優秀な学生が集まっている。そのため、その地域にある高等学校の学力水準も高く、生徒の保護者も大学教授や研究者が多くいる。そのため、本校SGH研究開発の海外拠点としてはもっともテキしている場所であると位置づけ、本校SGHの北米拠点とした。

3）北米拠点の研究体制



4）期待される効果

「課題探究Ⅱ」の研究内容が、現地でのフィールド調査に生かされる構造になっているため、学校内で行っている研究活動を世界の中で捉え俯瞰的に思考を巡らすことができ、新たな視点から課題研究を深めることができる。また、英語を通して論理的に他者に表現する勇気と、コミュニケーションに必要な判断力の向上も目指す。

5）内容

事前学習１）

高校１年生前期：PBL（Problem Based Learning）の基礎を学ぶ

・６ 領域に関するキーワード収集
・課題解決のための手法の学習
・文献調査の手法の学習

↓

PBL1
課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ
（教員から与えられる課題を３ か月で解決・達成する学習）

高校１年生後期：PBL（Problem Based Learning）の基礎を応用する。研究課題を設定する

PBL2
課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ
（生徒は１とは違う教員の許で学習（教員は同じ課題を指導する）
情報マップ作成（個人テーマに関わる文献調査のまとめ）

↓

研究課題を設定

事前学習２）

NC研修を協同で行っているEast Chapel High School, Chapel Hill High Schoolの日本語教員が本校を訪問し、NC研修の事前指導を行った。根エンドは2019.12.26に実施

事前指導の内容

・現地についての基本情報（学校の様子、授業のあり方、現地の天候等）
・これまでの現地における研究発表の様子
・タブレットでのGoogle Documentの使い方指導
・現地での課題研究に備えて、渡米まえにしておかなけ

ればならないこと
・プレゼンテーションｎ方法と話し方、質疑応答の際の留意事項　等

（事前学習の様子）

（NC研修生徒選考の過程）

GCの公募開始 → 各種プログラム参加 → 選考（職員会議）

GC: Global Committee の略 高校１ 年生を対象に参加生徒を募集
GC の活動：他校SGH 興プログラムの参加、来校留学生との交流等
選考用件：学業成績、活動履歴、コミュニケーション力等

プログラムの具体的内容）
名称）
　SGH North Carolina 2019 Japan Exchange Program
訪米期間案）
　2020.03.07（土）～ 2020.03.16（月）
訪問団）
　引率教員２名、生徒10名
滞在中の行程案）
１日目
　08:20　セントレア発　JL3082　→　9:30　成田発　JL010　→　7:40　Chicago　着　→
　14:44　Chicago　発　AA3416　→　17:43　Raleigh-Durham International Airport　着
２日目～
　相手校でのプログラム（課題研究）
　於）East Chapel Hill High School, Chapel Hill High School
６日目　課題研究成果発表会（プレゼンテーションナイト）
　10名の生徒が、米国生徒とペアで発表10通りのプレゼン
　現地の大学教員（NC STATE NC University Chapel Hill等）
７日目　Research Triangleの大学２校の及び高校見学
　9:30　Duke University West Campus見学
　12:00　Franklin Street自由昼食
　13:00　UNC（University of North Carolina）Campus見学
９日目　振り返り
10日目
　7:14　Raleigh-Durham International Airport NC発AA802
　12:15　Dallass-FortWorth発JL011
11日目　16:00　成田着　→　18:30　成田発　JL 3087　→　19:50　セントレア着　解散

NC研修の特色）

１．NC研修は相互交流が特色である。
２．日米での滞在は、ホームスティが基本である
３．日米生徒は、訪米時、訪日時、それぞれの学校での通常授業を多雨兼する。
４．日本生徒の課題研究のフィールドワーク（FW）の場としてNC研修が位置付いている。
５．SGH終了後も継続してプログラムを行う。

６）SGH NC研修の軌跡

2011年度　名古屋大学G30国際プログラム開始
そのリクルート活動の一環として名古屋大学海外拠点（米国NC）州）の高校と附属学校の交換留学を推進することとなった。

2012年度　NC州の高校生６名、引率教員４名が初めて附属学校を訪問　07.01 ～ 07.05
本校生徒の家にホームスティ
NC研修開始附属学校生徒９名、教員２名がNC州を訪問　03.23 ～ 03.31
NC州の高校と附属学校の相互交流が開始される。

2014年度　附属学校がSGHアソシエイトの指定を受ける

2015年度　附属学校がSGH指定を受ける

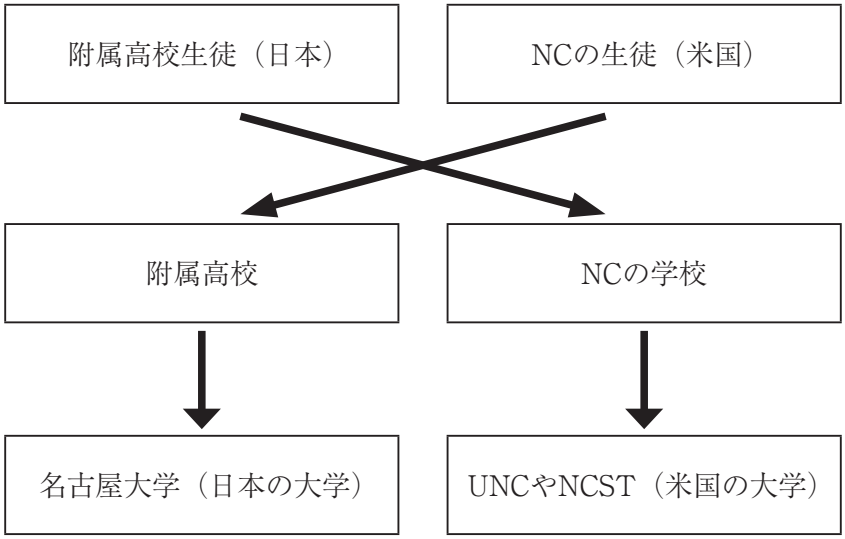
2016年　附属学校とNC州イーストチャペルヒル高等学校間で姉妹校協定が締結される

2019年度　新型コロナウィルスCOVID19のため派遣中止

※2012年度～ 2018年度の７年間にわたり合計67名の生徒をNCに派遣

７）今後の展開

本校のSGH研究開発指定は、2019年度をもって終了するが、NC研修は今後も継続して実施していく。実施内容は今後変化していく可能性はあるが、基本的なラインは変わらない。2022年から実施される新学習指導要領での「総合的な探究の時間」で行う課題研究がその中心となる。NC研修に参加する生徒は、自らが設定したテーマについて調査研究するためのフィールドとしてNC研修を行い、現地の高校生と一緒にアンケートや聞き取り調査を行う。最終的には、それらをまとめ、現地の高校生と一緒に調査結果を発表する。現在は短期間の相互交流ではあるが、将来的には１年間の長期交換留学も視野に入れた交流を目指す。最終形としては、相互交流でそれぞれの国を訪問した高校生が訪問国の大学に進学する工程を創ることである。



（文責　三小田博昭）